

平成 27 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	(公) ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 人と防災未来センター 研究員 石原 凌河
研究テーマ	津波常襲地域における災害伝承の特性と構造に関する研究

<助成研究の要旨>

東日本大震災の教訓として、減災の観点から、自然災害の教訓や知恵を伝承することの重要性があげられる。実際、岩手県宮古市田老地区では、高さ 10m の防潮堤が市街地を取り囲む形で築造されていたが、その防潮堤を越えて津波が市街地を押し寄せ、防潮堤の依存による安心感から多くの市民が逃げ遅れてしまい、多大な被害をもたらしたと報告されている。その一方で、三陸地方で昔から言い伝えられている「津波でんでんこ」という教訓が岩手県釜石市を中心に児童に広く伝承されており、東日本大震災発生時には児童の多くがその教訓を実践し、釜石市の小中学生の犠牲者はほとんど出なかったと報告されている。東日本大震災による被害を免がれた地域においても、今後 30 年以内に東海・東南海・南海地震や首都直下型地震等が極めて高確率で発生し、多くの被害をもたらすと言われているため、起こるべく自然災害に備えることは全国共通の課題だと言ってもよい。以上から、空間的に自然災害を制御するハード整備や、地域性を超えて、防災の側面を前面に打ち出して戦略を図っていくことは、想定外の自然災害に対処できないと思われる。災害と共生しながら、地域で蓄積された災害にまつわる教訓や知恵を地域資源として捉え直すとともに、こうした知恵や経験を集落内の共有知として伝承し、後世に災害の教訓として活かすことで、災害に対処できる集落が構築できるのではないかと考える。防災・復興計画やまちづくりにおいて、地域性を考慮することの重要性が指摘されているが、事前に過去の災害の教訓や経験について聞きとることで、掘り起こされた地域の特性を把握することができ、それらの特性を踏まえて、技術者等の専門家が地域の防災・復興計画や施策に活用することができるのではないかと考える。

そこで本研究では、津波常襲地域における過去の災害伝承・被伝承の内容を分析し、その特性を把握した。その結果、まず、災害特性によって伝承・被伝承内容が異なる傾向にあることが示唆された。例えば、昭和南海地震・昭和チリ地震の津波については、被災状況だけでなく、被災後の地域の様子についても伝承・被伝承傾向にあることが確認できた。過去の自然災害の伝承・被伝承の特性をみると、災害の側面のみを考慮した教訓や災害の恐ろしさや被害状況といった災害について全面に打ち出したものは少なく、家庭の様子や日常生活、地域特性、資材と関連したものが多く把握できた。抽出した伝承・被伝承内容をみると、防災や自然災害の普遍的な知識の面から間違えて伝わっているものが見受けられた。

以上の知見を踏まえて、地域単位で過去の自然災害の伝承・被伝承を広げていく意義と技術者の役割について考察していくとともに、地域における過去の自然災害の伝承・被伝承を活用例について提案した。